

修せざるにはあらわれず、証せざるにはうることなし

(正法眼蔵弁道話)

石川 順之

学校法人駒澤大学理事長

駒澤大学は、昨年度1592年に設立された「学林」から数えれば430年、1882年の「曹洞宗大学林専門本校」から数えれば140年の節目を迎えた。文系中心、学生数1万4000人の総合大学である。建学の理念は永年、自己形成を目指す「行」と、学問研究である「学」とは一体であるという「行学一如」ぎょうがくいちじよで具現されてきた。

半世紀前に私はこの大学で学び、大本山永平寺で修行し、曹洞宗僧侶として今日に至る。そして、昨年に学校法人の理事長に就き、社会の変化の渦中にある大学の重責を担い1年を迎えようとしている。

コロナ禍がようやく収束しつつあり、経済活動は緩やかに改善し賑わい、外国人観光客が戻ってきている。大学も対面講義に戻り、キャンパスに1万人の学生が行き来し、教室、図書館で学んでいる。情報通信技術がいかに発達しようと、人と人が直接接するに優るものはないということだろう。オンライン講義を

余儀なくされていた先生方も学生の反応を肌で感じつつ講義を行い、研究に勤しんでおられる。職員もこの数年間の経験を踏まえて様々なことに取り組んでいる。皆、日々のことに忙しい。私も大学で職務に追われている。

しかし、理事長としては、中長期的なことにも思いを向けざるを得ない。私立学校法の改正を受けてガバナンスの改善に取り組みなくてはならない。大学、特に私立大学は多様である。建学の理念、大学の実情に応じたガバナンスをあらためて再構築していく。

より長期的なことに目を遣れば、日本の経済社会は停滞し、閉塞感が見られ、大学においては日本全体で進学する学生数は減少し、低成長、国の財政事情悪化などもあって、大学の在り方が問われている。少子高齢化、人口減少は変えられるようなものではなく、人々はせめて今の状態を守ろうとする。停滞、閉塞感の所以^{ゆゑん}である。実際、大学の中で職務に従事していると、閉塞感、あるいは、今のままでいい、この程度であれ

ばいい、という空気を感じることもある。私はこのような見方にこれまでも違和感を覚えてきたし、今、理事長として違うと考えている。経済成長率も他の先進国に比して低めであるが、労働時間の減少を勘案すると成長率も他の先進国と遜色ない。経済の停滞は、人口の変化によるというより、不良債権問題への対応としての費用削減経営が今も続き、投資、人材育成が不足しているからであろう。さらには、先進国としてフロントランナーになったのに、これまで他国を参考にしてきたため、自ら将来展望を描けないからだと聞く。停滞、閉塞感は企業も大学も現状維持でよしとしていることによるのではないか。

あらためて省みれば、大学は様々な課題に直面している。大学は若者の約5割を占める大学生に現代社会に求められる高等教育、自らの将来を描けるような高等教育を提供しているか。残り約5割の若者の職業人としての学びや、社会の様々な方々の学びに大学は何ができるのか。海外からの留学生や教員

に大学はどのような機会を提供しているか。日本の大学の評価が国際的に低下している中で、学術、研究教育はどうあるべきか。このような課題はこれまで新聞で読むことではしたが、理事長就任以来、彼方のことではなく、大学に関わる全ての者にとって自らの問題なのだと思えるようになった。私もその一人として、課題の大きさに比して理事長としての時間が限られているとしても、一歩でも進めなくてはならないと思う。

大学で学ぶ学生、教員、職員は様々である。自分が学んだ頃から半世紀経っている大学を異なる立場で見ると、あらためて体感する。しかし、大学の使命、務めはいつの世も変わるまい。学生が学び、一人一人の可能性を伸ばす。教員が研究、高等教育に勤しむ。大学職員が教育、研究を支える。さらには社会への貢献も行う。大学の経営者としては、社会の変化の中で、大学の務めを果たすべく、経営していく。あらためて建学の理念「行学一如」を心している。